熊本大学教育学部紀要
第71号, 177－181, 2022

# 教員養成課程学生における声楽意識調査研究

― 声楽歌唱発声法を中心に ―

中　原　雅　彦

# A Study of the consciousness on Vocal music of Teacher Training Course Students

- Focusing on vocal techniques -

Masahiko Nakahara

(Received October 1, 2022)

## 1. はじめに

我が国における西洋音楽は，主に明治期に入ってきたが，その中でも歌唱は学校で文部省唱歌を用いて広まっていった．明治以降から現在に至るまで，歌唱は学校音楽にとって重要なものである．学校音楽における歌唱の内容は時代の変遷によって少しずつ変化を遂げているが，学校教員は西洋クラシック音楽から文部省唱歌，そしてポップ音楽など，多様な歌唱を学校現場で指導している．歌唱を指導する際に大切なもののひとつは声の出し方, つまり発声法になると考えるが，学校教育現場において音楽の時間に，この声の出し方について何処まで児童・生徒達は学べているであろうか．実際には，合唱コンクールなどの行事際に声の必要性を感じ，より良い歌声の為に取り組むのが現状の様に感じる．学校教育においても歌唱をおこなう際には発声法が必要であると考えたため，令和 4 年 3 月から 8 月にかけて熊本大学教育学部の声楽に関する授業を履修する学生にアンケートをとり声楽の発声法を中心に調査をおこなった．その結果，学生の声楽歌唱の意識変化がどのように見られるのか，また，発声法の意識変化によってどのように歌唱に影響を及ぼしたかを本稿によって明らかにしていきたい．

## 2. アンケートの概要

熊本大学教育学部での初等コースでは，1 年次に初等音楽を履修することが必修となっている．中等コースでは，声楽演習Ⅰ・Ⅱが必修となっており，教員養成の為に声楽を学ぶことになっている．

今回，上記の声楽に関する授業にて，「声楽についてのアンケート」を令和 4 年 3 月から 8 月にかけておこなった．対象学生は，初等音楽を履修している 1 年次の学生と，中学校教員養成課程音楽 2 年次から 4 年次の学生，計 215 名に対しアンケートを実施した．アンケートは，4 段階の尺度評価と自由記述で構成した．

4 段階の尺度評価の質問は，以下の 4 項目である．

質問 1：歌唱を行う際，声の出し方（発声法）に悩んだことはありますか？

質問 2：発声法を学んだことによって声の出し方に対する意識の変化がありましたか？

質問 3：発声法を学んだことによって声の出し方に改善はありましたか？

質問 4：発声法を学んだことによって楽曲に対する意識や歌い方に変化を感じましたか？

4 段階の尺度評価回答は，「とてもそう思う」「そう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」とした．

また，自由記述では，尺度評価項目に関して，以下の 2 つを設問した．

Q1.（質問 2, 質問 3 で「とてもそう思う」「そう思う」と回答したものに）「どのような時に感じましたか？出来るだけ具体的な例をあげて下さい.」

Q2.（質問 4 で「とてもそう思う」「そう思う」と回答したものに）どのような時に感じましたか？できるだけ具体的な例をあげて下さい」

合計 114 名の有効回答を得た．

## 3. アンケートの分析：全体の傾向

アンケートの結果について，まず，全体の傾向から見ていくことにする（図 1）

4 つの設問中，質問 1 で「そう思わない」と回答するものは 114 名中 5 名，質問 2 ～ 4 について「そう思わない」と回答するのは 1 名とあり，多くの学生が声楽を学ぶことに意義を感じているようだ．

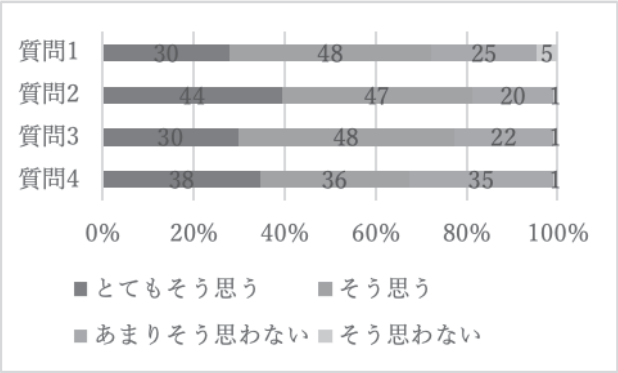


図１　質問１～４：全体集計（値は実数）

一方，質問３の「発声法を学んだことによって声の出し方に改善はありましたか？」と発声に対する意識変化を問うた設問では，「あまりそう思わない」と回答するものが約３割に及んでいる．当該の学生達は，授業を通して十分意識できるまでに至っていないと推測することも出来るが，授業で声楽を学ぶ以前から変化がなかったとも解すことも出来よう．

しかし，自由記述のなかには「発声の際に姿勢を意識するようになりました」や「喉を開く意識をもってすることで，特に高い音を出すときに無理をせずに声を出すことができました」などの回答が多くみられ，声楽の発声法を学ぶ意義の本質をしっかりと実感している学生が少なくないことが分かる．

## 4. アンケートの分析：コース別の考察

アンケートでは，初等音楽履修の１年次学生と，中学校教員養成課程音楽科の声楽演習Ⅱ・声楽演習Ⅳ・声楽実技Ⅱ・卒業研究履修の１年次～４年次学生に分けて考察することとする．

### 1）初等コース（初等音楽履修学生）

初等音楽は，既に述べたとおり必修科目である．質問１～４の回答から検討していく（図２）

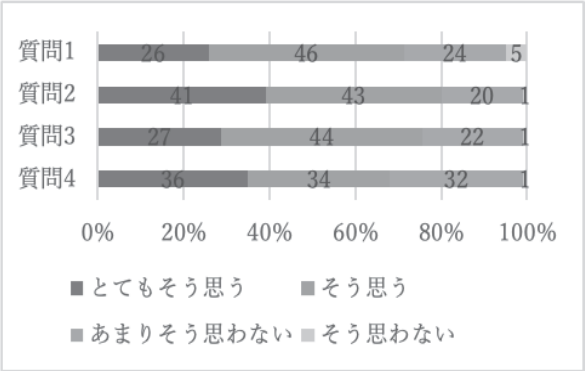


図２　質問１～４：初等音楽履修学生（値は実数）

声楽を学習する際の困難さを問う質問１は，「とても思う」「そう思う」と回答する学生が全体の70％と多く，音楽科教育で多く用いられる西洋のクラシック声楽歌唱に困難を感じるものが多くみられる．また「あまりそう思わない」「そう思う」と回答する学生が30％を超えている．質問１に関する自由記述は設けていなかったがQ1には，「高校時代は合唱部だったので，先生にその声はちがうといわれたとき，何をかえればいいのかわからず悩みました」，「もともと高い音を出すことが苦手だったので，そこが少し改善された」や「歌をうたうことに苦手意識があるので，あまり大きな声で歌うことがこれまでにできませんでした」など声の出し方に困難をかかえているものが少なからずいることが分かった．

発声法を学び，声の出し方に対する意識変化を問う質問２は，「とても思う」「そう思う」と回答する学生が80％となり発声法を学ぶことによって，意識の変化を感じている学生が多いことが分かる．「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答する学生が20％いる．

発声法を学び，声の出し方に改善が見られたかを問う質問３は，「とてもそう思う」「そう思う」と回答する学生が77％を超えている．「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答する学生が23％となっている．

質問２と質問３に関する自由記述のQ1をみていく．（自由記述は原文ママ）

・「息を吸うときにおなかを意識するようになった」「歌を歌うときに，音の響きを意識して歌うようになった」
・息を吐いて声を出す時だけではなく，息を吸い込む時にも意識をするようになった」
・「声を出すときに体のどの部分を意識すれば良いのか考えるようになった」
・「母音を意識して歌ったことがなかったので子音を加えて歌う前に母音だけで歌ったときに意識の変化が生じた」
・「課題に取り組んでいるときに，以前はあまり上手く出来なかった裏声と地声の切り替わりがうまくできた際にそうおもいました」
・「発声法を学んでから歌う時に口の形や呼吸の方法などを考えながら歌っていたとき．また，それによって以前よりも声が通るようになったと感じたとき」
・「喉を開く意識をもってすることで，特に高い音を出すときに無理せずに声をだすことができました」

・「鼻からしっかりと息を吸って歌う様になったので，高い音を出すときや長いフレーズを歌うとき歌いやすくなった．また，母音をつなげて歌う事を意識したことによって，以前より滑らかに歌えるようになった」
・「歌い出しの第 1 音目を歌うときに，今までは強く出し過ぎてしまうことが多かったです．ですが発声法を学んだことで，まずは『息の使い方』を意識し，次に『次のブレスまではく息の調節』を意識して歌う事ができました．その結果，歌い出しが強く歌い終わりが弱いという状況を少し改善させる事ができました」

これらの回答から声の出し方に対して意識変化があり，発声法を学ぶ前と後で，意識の違いに変化があったことがわかる．また，発声法だけにとどまらず，歌唱の仕方に改善を感じている回答をする学生がいることが分かった．

質問 4 に関する自由記述の Q2 をみていく．（自由記述は原文ママ）

・「発声法をまなんだことで《ふるさと》を自分のイメージである優しい感じに聞こえるように音を伸ばしてみたり，聞き取りやすいけれどまるい音を意識したけれど難しかったし，あまり納得のいく音は出せなかったとき」
・「母音を意識して発音するようになりました」
・「いつもより自信をもってうたうことができるようになったと思います」
・歌うときの声の響きや伸びが良くなったと感じました」
・YouTube（The First Take）などで歌手がどのように発声しているか注目するようになった」
・「母音のつながりを意識してメロディーを歌うことができた」
・「発声に気をつけて歌うようになると，作曲した人がどのような気持ちでこの曲を作ったのだろうと考えて歌うようになりました．その時に歌い方の変化を感じました」
・「まずは母音で歌ってみることによって，何が変わるのかという疑問が正直ありました．しかし母音で歌う前と後の自分の歌声を聞いてみると，歌詞に感情が乗っているように聞こえたので，その時に感じました」
・「楽譜に書いてある記号や速度を意識して歌うようになった．また，おとのつながりやブレスの位置も考えるようになった」
・「発声法を学んだことで，歌いやすい方法や，楽譜を見て構造をよく分析することで，より楽曲に対する理解や深まり，歌いやすくなっていたように感じたから」
・楽曲に対する意識は，ただ歌うだけではなく，正しい発声法で歌うことで，歌がよりよく聞こえると感じました．また，母音を意識することでフレーズを意識できるようになりました」
・「正しい発声をすれば，楽譜に指示通りに歌いやすくなりました．（のどにあまり負担をかけずにクレシェンドができるなど）」
・「発声法を学んでからは，この歌はどのように発声して歌えばいいのかを考えるようになりました」
・「発声法を学んだ後は，楽曲をもっと丁寧に歌おうという姿勢だったとき」
・「今までは思うように歌えないこともあったが，発声法を学習してからは伸びやかな歌声が出せた気がした．その時に変化を感じた」
・「ただ楽譜の指示通りに強弱をつけるのではなく，母音唱を行って練習することで，楽曲に対する意識が変化しました．なんとなくではありますが，楽曲で表現されている風景が浮かんできました」
・「授業で用いられた歌以外の歌も歌ってみることで，どのように歌えばよりよくなるのかなどを考えるようになったことが歌い方や楽曲に対する意識の変化だと感じました」
・「今までも楽譜は読めたけど，実際に発声してみたらより細かい部分，特に記号でその違いがわかった」
・「《ふるさと》という楽曲を今回は使用して練習を行ったが，母音唱などを行ってレガートを意識することによって曲全体のつながりを感じながら歌うことが出来た．だが，楽曲に対する意識を高めるためには，まだまだ練習が必要だと思う」

Q2 に回答する学生の多くに，発声法と歌唱法につながりがあることを認識した回答がみられた．このことは，学生が学校現場に出て，音楽の教鞭をとることがあるときに助けになると考える．歌唱は，歌詞と旋律によって歌われるが，この 2 つを融合させるには，発声法が不可欠になるのではないであろうか．このことが自由記述の中に見て取ることができる．記述の中に歌い方や歌詞についての記述があり，これは発声法に意識を向けることによって，歌唱全体の意識変化につながったと考える．初等音楽でおこなった授業では，発声法の特徴として，「喉をあける」（声道をひろげる）という表現で学生に指導したが，日常生活で「喉をあける」ことを考えることは少なく，このことによって

声を出すことへの意識変化につながり，歌唱での歌声と変わり，歌声を意識し体感することによって演奏へつなげる効果があらわれているようだ．また，歌唱法では，歌詞から母音だけを取り上げて歌う「母音唱」を用いて旋律を描く指導をおこなった．これは，「喉をあける」ことをより意識出来るようにするためである．また，旋律をなめらかに，つまりレガートに演奏するように意識することを促したのであるが，回答の中には，母音唱をおこなう利点を感じ，演奏法につなげている回答も見られる．

**2）中等コース（声楽演習Ⅱ・声楽演習Ⅳ・声楽実技Ⅱ・卒業研究履修学生）**

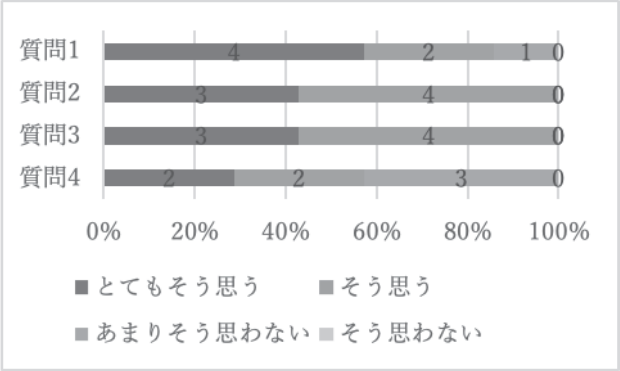


図２　質問１～４：中学校教員養成課程音楽１年次から４年次学生（値は実数）

声楽を学習する際の困難さを問う質問１は，「とても思う」「そう思う」と回答する学生が全体の85％と多く，音楽科教育で多く用いられる西洋のクラシック声楽歌唱に困難を感じるものが多くみられる．「あまりそう思わない」「そう思う」と回答する学生が15％となっている．

発声法を学び，声の出し方に対する意識変化を問う質問２は，「とても思う」「そう思う」と回答する学生が100％となり発声法を学ぶことによって，意識の変化を感じる学生が多いことが分かる．「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答する学生はいなかった．

発声法を学び，声の出し方に改善が見られたかを問う質問３は，「とてもそう思う」「そう思う」と回答する学生が10割となり声の出し方に改善がみられたようだ．「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答する学生もいなかった．

質問２と質問３に関する自由記述のQ1をみていく．（自由記述は原文まま）

・「声楽の授業中にはじめ，自分の歌声がカラオケで歌う時にてきしていて，声楽とは少し異なると言われたことがあり，最初はどういう意味かあまりわからなかったが，発声法について学んでいくうちに，カラオケのときの声と声楽のときの声の区別が自分なりにつくようになり，気持ち良く，そして，楽に歌えるようになった」
・「発声練習を行う際，今までと意識を変えてみたところ，声の伸びがより感じられるようになり，身体全体を使って声を出すことができていると感じたとき」
・「歌を歌うことは大好きだが，声楽となると割と抵抗があり，苦手意識を持っていたが，発声法を学び，声を楽にだすことが出来るようになって，苦手いしきを薄めることができた」
・「初めは五線譜を超えた音域が出ずに悩んでいましたが，無理なく高音を出すコツを自分なりに掴んでからは，高音を出すのが苦にならなくなりました」
・「高音を出すときに色々と考えすぎてしまうと余計に体が硬くなって出づらくなってしまいますが，頭声を意識して声が後ろから回ってくるようにイメージして歌うと高音が出しやすくなりました．また，声を出すときは精神面も大きく関わっていることが分かったので，体の反応に任せて歌う事を意識することで声が出しやすくなりました」

中学校教員養成課程音楽の学生からは，初等音楽履修学生１年次の学生と比較すると，声楽を学ぶことによってより具体的な内容で発声法に気づきがある記述がみられる．これは，授業時間数の違いとも言えるが，中学校教員養成課程音楽音楽の声楽授業では，個人レッスンの形態をとっており，より個人に適した指導をおこなえることが大きい理由なのではないであろうか．特に，最後にある歌唱発声時の体の使い方に関する記述からは，歌唱発声時に関する意識の高さが見られる．さらに，精神面にも触れていることが興味深い．歌唱は，高度な演奏になる場合は歌唱発声を考えないようにする必要も出てくるが，その一端を垣間見ることが出来る．

質問４に関する自由記述のQ2をみていく．（自由記述は原文まま）

・「歌詞の解釈や強弱記号などの把握をおこなったうえで，“ここの部分はもっと声を響かせるように歌いたい”と思ったときに，すんなりと表現が可能になったとき」
・イタリア，ドイツ，日本の歌を歌ってきたが，そ

れぞれ言葉による歌い方の違いがあり，難しさを感じたと同時にもっといろんな曲に触れてみたいと思った」

・「“この音を出すことができる”という確信がもてるようになって，曲に対して恐怖心や不安感なく臨むことができるようになったと思います」

・「以前は歌詞の方に意識が集中していたが，発声法を学び理解できるようになってからは，歌詞を音程に合わせて歌うだけでなく，歌詞に意味を持たせたり，曲の雰囲気を自分の感じるように表現したりと，楽曲はもっと幅広く，工夫する余地がとても大きいということを知ることができた」

Q1 と同じく，初等音楽履修学生 1 年次の学生と比較すると，中学校教員養成課程音楽の学生の回答からは，楽曲に対する変化がみられるとともに，発声法を学ぶことにより，歌詞だけでなく声に対する意識の向上が見ることができる．歌唱は，人間の声によって歌われるが，その声は楽器と同じく使い方がある．最後の 2 つの回答からは, 声による表現をすることの喜び, 楽しさ，嬉しさがあると考えるが，同時に，難しさ，困難さを理解することにより学生が指導する児童・生徒に，より豊かな歌唱音楽表現を指導できるようになるのではないかと考えさせられる回答がみられた.

## 5. まとめ

本稿の結論は，次の通りにまとめられる.

・声楽の経験によって状況は異なるが, 西洋クラシック音楽の発声法を学ぶことにより，歌唱表現に変化がおこることを学生は感じとれた.

・発声法の重要性を知ることにより，普段の生活にある歌唱による音楽の聴き方に変化がおこることが示唆された.

・発声法を学ぶことにより，歌唱音楽表現の豊かさを学生が感じ取り，理解することができるようになるといえる.

・発声法から母音唱，そして歌詞の順番が歌唱をおこなう上においては有効と考えられる.

以上，本稿では，学校教育現場で児童・生徒に歌唱指導をするであろう学生に，主に発声法について焦点をあてて考察を試みた．発声法を意識することによって表現についても意識が行くことが明らかになったため，現在学校音楽教育現場で多く行われている歌詞からのアプローチだけでなく，発声法から音楽表現につなげるアプローチも有効なのではないであろうか．発声法の指導については，学校教育現場では様々な課題を抱えているが，特に女性教諭が変声期を迎えた男子児童・生徒への指導のしにくさが言われて久しい．このことについては今後の課題とし，追求していければと考える.

## 参考文献

1）フースラー，フレデリック / ロッド＝マーリング，イヴォンヌ（1987）:『うたうこと』音楽之友社

2）中原雅彦・志民一成（2013）:「器楽専攻者の専門教育としての声楽指導の意義」

3）山田耕筰（1979）:「日本歌曲の基本的な演唱・演奏法に就いて」

4）後藤暢子・藤山一行・團伊玖磨編集（2001）:『山田耕筰著作全集〈1〉』岩波書店

5）東京藝術大学付属図書館貴重資料展実施委員会（2013）: 高野辰之展唱歌「ふるさと」の原点をたずねて

6）山本文茂，後藤暢子（1994）: ニューグローヴ世界音楽大事典　4 巻 pp163-168, 18 巻 pp528-531 講談社